

II 取材ノート



共楽館とその広場

札幌への旅

初めて乗った飛行機の中で、これから会う花岡事件の体験者、札幌市に住む劉智渠さん、李振平さんのことを考えていた。二人とも非常に立派な人で、事件のことも積極的に話してくれると聞いていたが、やっぱり不安があった。二十四、五歳の多感な青年が、日本軍に捕まり、強制労働させられ、あげくの果て、蜂起にも失敗、何百人もの犠牲者を出したなどという「汚辱」の思い出を快く話したりするものだろうか。

しかし、二人の話をおかずには、花岡事件の取材は一步も進まないと感じていた。花岡には、尾ひれのついたらうわさと、重苦しい沈黙しかなかった。取材を始めて、何冊かの本を読み、人の話を聞きながら、札幌行きを計画した。二人に直接会い、確かめたいことがあった。中山寮での生活や日本人の虐待を何故一年間も我慢したのか。戦後、日本人に復讐しなかった理由は何か。どうしても理解できなかった。

昭和四十九年一月、出稼ぎの連載をしていた時に、野添憲治さんに会った。三省堂新書で「出稼ぎ―ある少年伐採夫の記録」を出したこの人が、花岡事件に取り組んでいることは、その時初

めて知った。「新聞で花岡事件の連載をやらないか」と野添さんに勧められたが、たじろいだ。四百人以上が死んだ事件は、みんなが忘れたがっているに違いない。今までも本や雑誌で取り上げられている。今さら、新聞でほじくり返す必要もあるまい、と思った。学生時代、日本軍の、中国での残虐ぶりを書いた「三光」(カッパブックス)を古本屋で手に入れたが、人間の首が宙に飛んでいる写真を見ただけで気味が悪くなり、中味は読まずに友人に貸してしまった経験もある。今年(昭和五十年)になって、急に連載することに決まった。五十年という年をきっかけに、各雑誌が、輝かしい昭和の歴史を回想し始めていたから、それに対する反発もあった。もう十分語り尽されているようで、そのくせ、地元秋田では語り継がれていない花岡事件を戦後三十年を機に取り上げることが、それなりに、戦争というものをもう一度、人々の目の前に据えることになるだろう。花岡事件の取材に入ったのは、六月十八日だった。

札幌市のパチンコ屋。奥の階段をきしませながら二階へ上ると、狭い事務室に劉さんがいた。昔は陸上競技の選手だったといい、大きな体でソファーに座っていた。神経が細やかそうで、そのくせ温厚で気さくだった。花岡事件の陰惨なイメージとは正反対だ。少し聞きづらい日本語で話してくれた。

話をテープで録音しながら、ずうっと劉さんの目を見ていた。時にするどく光り、時にゆがんだ。声の調子が上ずって、手ぶりが入って、すぐやんだ。インタビュというより、長老に民族

の悲劇を聞いているようだ。三十年前、中山寮で何を考えていたのだろうか。「ぼく現場出ないで、病気の人の世話する。運がいい方でした」という劉さんの話を聞きながら、ふと、劉さんたちを虐待した人間と自分とは無関係だろうか、と思った。すると急に、無上に劉さんに謝らなければならぬのではないかという気がしてきた。床に手をつけて、シミマセンと土下座したら許してくれるに違いない。いや自分は無関係だ、責任などあろうはずがない。そんなとりとめのないことをあれこれ想っていた。

翌日、李さんを訪ねた。寝まきで出てきた李さんも、体の大きな人だった。劉さんほど雄弁でないが、李さんの言葉も重かった。たまに、せき込むこの人を、おくさんが気使っていた。おくさんの話――。

「日本の兵隊なんか、日本人に対しても随分ひどかったそうですね。面会にいった家族の目の前で、返事が悪いってビンタしたりするんですね。自分の国以外の人間に対する優越感も強くて、朝鮮人や中国人をバカにする。戦後、私が結婚した時も、金に困って支那人に娘を売ったなんてカゲで言ったらいいですよ。今でも年寄りには偏見あります。私は、この人の故郷へ先に帰り、一人で六年暮したけれど、全然、変な目で見たりしない。戦争中、日本軍がイタズラで人を殺したり、お腹の大きい女の人を銃剣で突き刺したなんて聞くと、氷の水でもあびせられたような気がしました。でも、戦争をしたのはあなたではない、あなたは同胞だって言うんです。つくづく、

日本は島国だから、気持もあんなに小さくつまらなくなっただのかなと思いましたね。」

劉さん、李さんがなぜ札幌で暮しているのか。同じ日本でも、他の土地と比較にならないくらい新しいこの大都市には、みんなが新参者だという気易さがあるのかもしれない。

劉さん、李さんの話を聞いていて、なぜ一年間も我慢したのかという問いは無意味な気がしてきた。事態はずうっと深刻だった。どっちみち死ぬんだと覚悟して蜂起するまで、絶望的な生活の中でもまだ一縷の望みがあったに違いない。

花岡を訪ねて

取材用のジープで花岡を初めて訪ねた時、そこいら中から見つめられている気がした。新聞社の旗を付けた車だから、目立つのも事実だが、それ以上に特殊な目で見られていると感じた。これは、裏返してみれば、こちらが特殊な目で花岡を見ていたからだろう。そう考えて、なるべく自然に、いつもの取材と同じように話を聞いて回った。共楽館前、桜町と次々に取材をした。何人かが「知らないよ、戦後引き上げてきたんだから」とすげなく取材拒否した。ああ、やっぱりなど思ったが、積極的というか、スラスラと話してくれる人も多くて、少し意外だった。ちょうど、その日の朝、NHKのテレビで花岡事件を放映していて、呼びさまされた記憶が、人々の口

を軽くしていたのかもしれない。
全日自労花岡分会の人たちは、ほとんどが花岡事件のことを知っていた。遺骨発掘に参加した人もあり話の中身も具体的だ。「今しゃべっても罪になるめえな」と確かめてから、拷問の様子を話してくれた人もいた。「おらぁ、こわくてな」といった顔は、三十年前の光景を思い出してゆがんでいた。

中山寮がすでにダムの底に沈んで現場がなくなっていたのは残念だった。死体が埋められたという大穴や鉢巻山も、青い鉱泥の下で黙っているのだ。ツーンと鼻をつく水の臭い。日中不再戦友好碑が建っている丘をおり、排水路沿いに歩いてダムに突き出した通路を歩いて行った。足元の水は、鈍色に濁って、薬品のような青銅色の底が見える。木や草もポツンと枯れたまま立っていた。この水の底に、かつての中山寮が沈んでいるのだ。ツーンとくる臭いに追い立てられるように、そこを去った。

しかし、三十年前そのままの共楽館を見ても、広場には自転車や車が並んでいて、あっけらかんと何の面影もとどめていない。広場に立って、両手をしばられ、ぐるりと野次馬に囲まれ、棒で殴られながら三日間放置された中国人の苦しみを想像してみたが、強い日差が照り返しているだけだった。共楽館の中にも入って、見せてもらった。痛みがひどく、二階は「出入り禁止」になっていた。舞台や観客席の作りは立派だ。案内のおばさんが「昔は大したものだったですよ」

というのを聞きながら、あの天井からナワでぶら下げて、このあたりで棒を持ってぶん殴ったのかな、と前日聞いたばかりの話や、「花岡ものがたり」にあった版画の絵を思い浮べていた。

共楽館まえの ひろばわ

この世の 地獄

いきもたえだえの あの人がたを

三角棒さ すわらせ

くそ小便にも 二人つなぎ

ギラギラする ま夏のまひる

鉱床だ 棒だ 刀のさやだノ

いきもつかせぬ

のませず くわせぬ三日間

おらだちわ あきめくら みたいに

ながめていたばかり

くされ まぐろか

くたばった馬か

おりかさなつて

トラックからけおとされタス

二人ずつ しばられたまンま

そのところ 花岡共楽館のひろばわ

いまも あの人がたの血が

にじんできいるド

その血わ ぬぐいきれぬ

この世に 犬ちくしょうめらのいるかぎり

いまもなお その広場に――

〔花岡ものがたり〕から

この共楽館が取り壊されると聞いて、同和鉱業花岡鉱業所を訪ねた。「共楽館のことについて……」と切り出すと、応対に出た副課長が用心深い顔をした。「立派な建物ですね、いづころ建ったのですか」。晴れやかな顔に変わって得意気に説明していたが、花岡事件のことに触れたとたん、さあっと再び緊張した。「係が違うから知らない」「花岡川改修工事の発注者？ さあね、軍需省かな、うちかな」「うちは花岡事件とは一切関係がありませんよ、テレビであんな放送されて誤解されると困るんです」。憤然としていたその怒りようが、花岡事件の異常さを感じさせ

てくれた。

共楽館の中からは

身のけだつうなり

ぶつたたく にぶい音

びん びん ゆれる針がねに

親ゆびくくって つるし上げ――

肉がむけ 指がのこったど

あとできいておらだ

からだか ずんとしびれたど

〔花岡ものがたり〕から

連載の中で、拷問や虐待の模様はあまり詳しく書かなかったように思う。劉さんも、李さんも多くは語りがらなかった。顔をゆがめ、今も目の前で同胞の誰かが殴られているかのように話すのを見ていて、とてもそれ以上詳しく聞きただせなかった。

人間を食べた話にしてもそうだ。武田泰淳の「ひかりごけ」を思い出し、わざと気安そうに話した李さんの心の裡を推しはかるのがせいぜいだった。補導員の虐待を受けて、神経が毎日逆な

でされていた当時の中国人の生活というのは、逆立ちしても、到底理解できないと思う。大事な
のは、そう知ることであるだろう。

沈黙の村々

花岡町からは、多勢の人が消えていた。鉢山が寂れて、鉢夫も家族もどんどん町を去っていた。
それと対照的なのが、周辺の村々。獅子ヶ森の山狩りに参加した人たちは、ほとんどが同じ地域
で今も生活を営んでいる。家々の造りは多少大きくなり、カリートタンの屋根が増えたが、人々
は、三十年、年をとっただけだ。

ここでは「三十年前の話を……」というだけで花岡事件だと通じた。口は重かった。はっきり
と拒絶する人が相次いだ。しかし、人から聞いた話だと、それにしても詳しく話をする人
もいた。

当時、家に残っていた男ときたら、兵役前の少年か、五十歳以上の年寄り、戦傷兵など、一人
前でないものばかりだったから、中国人暴動のショックは大きかったろう。

「三時半頃ふもとに着いた。明るくなってみたら、山のてっぺん真っ黒だべ。五、六十人はいた
な。なに、今みたいの木が大きくなってねえから、すぐ近くに見えたしな。何百人登ったもんだ
か、草木が倒れて支那人が通った跡、たった一晩で道みてえになっていたもんな」。 (芦田子で)

山狩りといっても、恐らくそう統制はとれていない。逃げる中国人も、道をまちがえて沢に下
ったり、バラバラになったりして、途中で何人もが捕まっていた。

へとへとに疲れていた中国人は、石を投げ、棒をふり回し、ふもとから投降を呼びかける日本
人どもを寄せつけなかった。攻防は三、四日続いた。無抵抗で捕まったものは、概して村人も温か
くもてなした。食事をさせ、煙草をやった。田畑の作物をバリバリ食べるのを見ぬふりをしてい
た人も少くない。が、抵抗したものは容赦なく打ちのめされた。

「捕まって聞かれても何も言わないのは相当苦しんだべ。誘導者らしく見えた人で口あかね
人だば、大分殴られたな。抵抗したら殴ってもよかったしな」。 (芦田子で)

長面袋で、中国人狩りの村人が、畑の中で怪しげな男たちに鉢合わせして、それとばかりに
たたきのめした。敵もさるもの、棒で打ち返してきて、それも大変な強さだ。何くそっ、とやり
返し、殴り合っつてふと気付いたら、隣り部落の間隔だったという。

殺気立っていたのだろう。商人留では、殴られて歩けないぐらい弱っている中国人がいて、戸
板に乗せて「死体のように」担いで運んだ。木に首を吊って自殺したというの、見せしめに殺
されたのかもしれない。「中国で戦争して半殺しになって帰ってきていた」元軍人は、とくに大
活躍した。日ごろ吹聴している手柄話を再現する必要もあったのだろう。そして、戦後になると
そういう人たちが十数人が、アメリカ軍に呼ばれて、横浜裁判に出頭した。証人調べで、当時、巢

鴨刑務所にいた三浦太一郎氏や、証人として日本に残った劉さんらに会わされた。「中国人は、実によく、自分がやられた相手の顔を覚えていたってな」。元軍人たちは、村に帰ると事件のこととは一切語らなくなった。酒の席でも、獅子ヶ森のことだけはタブーになっている、という。

取材中に、当時、この村々に「花岡にとられる」という言葉があったと聞いた。花岡とは、同和鉱業(当時は藤田組)の花岡鉱山のことである。十七歳のある青年は、軍隊の検査の前に醬油五合(〇・九リットル)を飲んで、首尾よく徴兵をまぬがれたが、花岡に動員された。

人々は食糧不足で、どんどんやせた。鉱山では、腕力が強い人間や要領のよい人間以外は、穴(坑内)に入らなければならず、空腹は耐えられなかった。食糧不足といっても、そこは農家だから、野菜や、米はある。

鉱夫が軍隊にとられた後、学徒動員や周辺住民の勤労奉仕で鉱山が支えられていた。軍需で増産に追われ、労働条件は極度に悪化していたのだろう。それが、七ツ館坑の人災をも生んだのだ。

やぶの中

事件の直接関係者に会って取材を始めると、それぞれの立場からの証言が全く食い違うのに困った。芥川の小説「藪の中」そっくりのことが、次々と起きた。ある程度は補足取材で一応の結論を出したが、できるだけ、食い違いをそのまま原稿に出すようにした。事実に対する相対立す

る証言こそ、事件の本質を物語っている、と思ったからだ。

その意味で、一番興味深かったのが、元大館警察署長・三浦太一郎氏(七二)の証言だった。

第一に、三浦氏は中山寮の中国人は捕虜ではなく華労だと強調した。「最初は八路軍の俘虜だったかも知らんが、河北省のどこかで指導して、体力、思想的に日本で役立つ者を選んだんですよ。契約書だって会社にはあったんだもの。賃金はね、戦争終ってから未払いのものを鹿島に払わせたんだが……」。捕虜でないから、ジュネーブ協定の俘虜虐待にはあたらなはずだと言いたげだった。しかし、劉さん、李さんとも、契約書も賃金ももらわず、自分を俘虜だと思っていたのだ。

第二に、共楽館広場、館内での拷問を否定した。劉さん、李さんの話や、拷問を見たという一般の人の証言からすると、明らかにウソだと思う。館内での取調べは検事局の仕事だったというから、三浦氏が知らないだけともいえる。ただ、夜明け頃に密告があったこと、共楽館広場に集まり、中山寮の現場検証で三日間放置された経緯などは、なるほどと思った。

第三は、遺骨を送還したはずだという話である。三浦氏はほぼ次のように話した。二十年十月末頃、名前の分っている三百二十七、八人分の遺骨を骨箱に入れて貨車を一つ買い切り、大館駅から送った。名前の分らない遺骨(これもおかしな話だが)七十数人分だけは仕方なく信正寺に預けた、というのである。「こんな大ききの立派な箱でね」と手振りをまじえ、列車が混んでいた時だから、他の乗客に迷惑がられたと聞くと、ついその話をそのまま信じてしまいそうだ。

しかし、鹿島組が信正寺に預けた遺骨は、置くところもなく本堂に仮安置されていて、老住職が一人で守っていた、という。昭和二十四年十一月になって、鹿島建設が小さな祠を建て、本堂の遺骨を移した。この祠というのは、畳一枚分ぐらいの上ぶたに「華人死没者追善供養塔」と書かれた高さ五十センチほどの碑が建っている。上ぶたの面積から推定すると、とても四百以上の骨箱が入っていたとは思えない。

この疑問は、昭和二十八年、供養塔を開いて遺骨を取り出した佐藤和喜治氏が「はっきりした数はともかく、まちがいはなく四百近い箱があった」と証言したことで、一応、三浦氏の記憶違いということになるが、どうも釈然としないものが残る。

また、三浦氏は、蜂起事件の後、五十人近い死体をまとめて穴に埋めたことについて「燃料もないから火葬はできないので、耿大隊長に話して承諾書も書いてもらった。それを鹿島組がなくしてしまって、裁判の時は不利になったのだ」と残念がった。それは事実かもしれない。が、問題の本質とは何の関係もないことではないか。

中山寮事務員だった越後谷義勇さん(五一)は、いわば良心派だ。中国人を殴らず、むしろいろいろと世話をした。今年も劉さんらに招かれて札幌まつりに行ってきた。戦争経験のないこの人は、当時の中山寮の日本人の中で、一番人間らしい人だったのだろうが、この人の証言を聞いて、

少し驚いた。

蜂起の際、仲間に殺された軍需係の任鳳岐について「悪い人なんかでない。暴動に反対したので殺された。自分だけ食糧を食って太っていたなんていわれるけど、そんなに太ってもいなかった。みんながそういう目で見たからだ」というのだ。

劉さん、李さんの話や、これまでに出版された本には、任をかばった話はなかった。松田解子氏の小説「地底の人々」では、売国奴としてさんざんにこきおろされているこの人が、どんな人間だったのだろうか。真相の解明はむずかしいだろう。

さらに、越後谷さんによれば、鹿島組が、食糧調達のために大分骨を折っていたから「組もやれるだけはやってたんですよ」という。犠牲者があれほど出たのは、病気ということになるが、それも「組では毎日病院へ連れていった」とすると、何だか、中国人が勝手に死んでいったようにも聞える。

劉さん、李さんの証言では、これらの点が全く逆転する。食糧は不足しっ放しで、それこそ人肉にまで手を出したくなる飢餓状態に追いこまれていた。医者が来ても、死亡診断書を書くだけで、それもほとんどが体裁を整えるだけだった。この食い違いは、最も良心的な越後谷さんさえ、日本人の立場、加害者の立場から事態を見ていたせいではないか。被害者の立場にどんなに同情し、近寄っても、同じ場所には立てない。「人の足を踏んでる人間には踏まれているもの

痛みは感じられない」のだから。

不幸な分裂

取材の意図について、確かめられたことが二度あった。何のために、どういう取材をするのかと訊かれ、戦後三十年を迎えた今、秋田でもほとんど忘れられている花岡事件をもう一度考え直したいのだ、と答えても、「何のために」と追及された。二度と戦争を起こさないために、と答えながら、新聞の記事でそんなことまでできるのかな、と考えていた。

大館桂高の奥山昭五教諭は言う。

「トキキョメンタリー花岡ならもうたくさんです。戦後、地元の人たちが花岡でどう運動し、遺骨送還や、慰霊碑を建てる運動をしてきたのか。教師たちが、授業のカリキュラムに花岡事件を組み入れ、本当の意味の平和教育をしてきたか……。そこに視点をおかず、ただ、事件の残酷さを描き、地元が忘れていく、これでいいのか」ではあまりに一方的でしょ。四十七年の日中国交回復で、ブームのようになって、花岡事件を取り上げているけど、四年間一人で四百人近い遺骨を守り続けた信正寺の髙谷さんのことはすっかり忘れ、戦後一番早く、事件を世に問うた高橋実先生のことにも触れていない。もういい加減にしてくれという感じですよ」。

ある新聞が、奥山教諭から取材していったが、記事にならなかったことも、マスコミ不信の原因となっていた。マスコミ代表のような感じで一時間ほど話を聞きながら、この人が花岡事件にかけた情熱と、主張の正当さを教えられた。

もう一人、取材意図を問い正したが、日中友好協会正統本部にいる赤津益造氏だ。三省堂新書の「花岡暴動」に載っている写真より、ずっと若く見える、老闘士という感じの人だった。

「花岡を、特殊な事件として孤立させれば、いくら驚いたり、残酷だと感じてでもそれだけにとどまる。それでは無意味だよ。花岡事件を起こした侵略戦争とは何であったのか。それをきちんとふまえて、日中友好へと発展させなければならぬ。もう一つは、今の時期に取り上げるなら、日中国交回復後、現在予定されている日中友好平和条約が覇権問題をめぐってもめているのも問題だ。政府は共同声明から一步も後退しないと口では言いながら、現実では微妙に態度を変えつつある。そういう政治のあり方を批判し、本当に人民同士の友好が結ばれるような形にもっていくような意味を持たせるべきですよ」。

赤津氏にそう言われて、正直言って気が重くなった。とてもそこまで考えていなかった。たっぷりと説教を聞かされた感じだったが、その後で聞いた赤津氏の話はいずれも興味深かった。焼却されるはずだった米軍の資料が赤津氏らの手に渡った経緯、四人のスタッフが手分けして十数年の歳月をかけて、膨大な資料を出版した話。「世界」に載った「戦時中における中国人強制

連行の記録」も、その途中の副産物だった。

「小学校五、六年の時に辛亥革命の報に接して以来、中国に対する関心を持った。資料の解説や再編成をやりながら、占領下に育てられていった独占資本に対する、人民の意地を示してやろうと思っていた。それが人民国家として再生した中国との友好回復につながると思ってる……」と老闘士は笑った。

奥山教諭は共産党系の日中友好協会に属し、社会党系の赤津氏とは違う立場にいる。が、二人の態度には共通点が多かった。興味本意でなく事件と取り組み、歴史的な背景や、現在、花岡事件を取り上げる目的を明確にすること。赤津氏が、中央で、資料の整理に追われていた頃、奥山氏は現地で、白眼視されながら遺骨の発掘・送還運動や、花岡事件を共有の財産とするための地味な仕事を続けていた。

それなのに、四十一年、日中友好協会が分裂してしまった。花岡の現地で積極的に活動していたメンバーは、ほとんどが共産党系だったから、中国とルートを持つ日中友好協会正統本部とはしっくりいかなくなった。なんとも不都合な話だ。

「建設途中の中国にとっては、避けられない動きがあって、その余波で分裂したんでしょう。我々は何も変わっていません。が、いつだったか、現地を訪れた中国代表団が、不再戦友好碑の周囲に草が生えているとか花輪が小さすぎるとか、急に文句を言い出してびっくりしました。一人一

人に正統本部に入れと脅すような感じで……」と奥山教諭は苦笑する。しかし、話を聞いていても、何故、分裂したかは分らなかった。

花岡での奥山教諭をはじめとする日中友好協会の人々の活動は、もともとと評価されていると思う。そして、さらに発展させた「日中不再戦友好碑を守る会」の運動は、今後、地元だけでなく、中央の関係者もまじえた形で輪を広げていくべきだ。できれば、日中友好運動の原点の花岡が、不幸な分裂状態を解消するための基点にならないものだろうかと祈らずにもいられない。

加害者の被害

伊勢智得氏に会った時の驚きは忘れられない。酒屋に家を確かめ、いきなり訪ねて行った。奥で片付けものをしていた老婦人が、「花岡事件」という言葉で背を向けた。玄関のわきの居間にいた伊勢氏は、「忘れたよ、もう、話すこともない」と言いながら、玄関に出てきた。人の良さそうな老人だった。目を伏せて、額にしわを寄せて、深い記憶の底に凍っていた言葉を拾い集めるように、ポツリ、ポツリと話した。この人にとっては、花岡事件で時計が止まったのかもしれない。玄関の上りがまちに座りこんで、両ひざを抱え込んだ姿が痛ましかった。

仕事を続けながら、耳だけは澄ましていた婦人が話した。ぶちまけるように、夫が戦犯で逮捕されていた後、寝たきりの祖父と子ども四人を女手一つで育てなければなくなったときの

悲しみ、苦しみ。それはあまりにも大きかった。話しながら、そっと目がしらを押えていた。わきで聞いている伊勢氏は、さっきから中空を見つめたままだ。額によせたしわが一度だけスッと消えて、微笑んだ。幼稚園から帰ってきた孫娘が、おじいちゃんに「ただいま」を言いに来た時だった。

「夢を見ることがありますか、中山寮などの」と訊くと、伊勢氏は少し考えて答えた。

「帰って来た当時は、夜中に目がさめて。壁だな、と手で触わった。鉄格子じゃないかと思ってな……」。

一瞬、何のことか分らなかった。鉄格子と聞いて、この人が死刑囚として投獄されていたことを思い出した。中山寮での加害者は、被害者としての自分を夢に見ていたのだ。

もう一人、補導員の清水正夫氏は婿養子に行つて苗字が変っていた。やっと家を調べ、ジープで行つてみた。家の前に水をまいていた男が、ジープを見てオヤッと顔を上げた。それが元補導員だった。

「清水さんですね。」

「いや違うよ」。

「中山寮で前に補導員をやってましたね。」

「それはやってた」。

「その話をしてくれませんか。」

「いやだ。もう思い出したくない。水に流すことにしているんだ」。

「二、三年前に中山寮に居た人たちが会いに来たでしょ。」

「来た来た。興奮したすな。自分がやったこと覚えてるから。やっぱし、もう思い出さんことにしている」。

「あなたがやったことって何ですか……」。

そこまで聞いたとき、「父さん、ごはんだよ」と家の中で声がして、元補導員は家の中に入った。わずかな時間だったが、彼のあわてぶりと素直な取材拒否が、雄弁に、花岡事件における彼の役割を物語っていた。それは三浦太一郎氏の、にこやかな応待ぶりとは正反対だった。自分には悪いところがない、という自信と、自分は確かに悪いことをした、という反省が、両者の差を生んでいるのだろうか。

昭和四十七年六月、劉さん、李さんらが、越後谷さんらの案内でひょっこり、伊勢氏、清水氏らを訪ねた。テレビ局の企画で、カメラの前で握手したというが、ニコニコと差し出した被害者たちの手を加害者だった人間はどう感じたのだろうか。「何も仕返しに来たわけでないよ。昔のことを話し合つて、これから仲良くしようということだよ」と越後谷さんが取りなしても、清水氏はぶるぶる震えていたというし、伊勢氏も無表情だったという。

四百十八人

重要なことではないかもしれないが、取材したことを記事にする段階で困ったことも多かった。例えば、中山寮に強制連行された中国人と、日本で死んだ人数が何人なのか、資料によって微妙に違っていた。これをどう選ぶのが、簡単そうで意外に厄介な仕事なのだ。

強制連行された人数は、日中不戦友好碑に刻まれた九百九十三人(昭40)が一番多く、九百八十六人(「世界」論文、昭35)、九百八十二人(「中国人は日本で何をされたか」、昭47)、九百七十九人(「花岡暴動」、昭47)と諸説がある。

例えば、「世界」によると、第一次二百九十九人、第二次五百八十九人、第三次九十八人が、「乗船配置」された。野添憲治氏の「花岡事件の人たち」の証言では、この第一次は三百人いたのが「トラックで青島の収容所から船に運ばれる間に一人が逃げて射殺された」というのと照合する。その後、船の中で一人が病死、一人が海に飛び込み、下関から花岡までの汽車で二人死んだから、中山寮に入ったのは二百九十五人という。ところが、越後谷氏が、書記に作らせた第一次連行者の名簿には二百九十八人の名が載っている。ついでに「草の墓標」(昭39)を見たら、今度は二百九十九人のうち、船中で三人、途中で二人が死亡して、実際に中山寮に配置されたのは二百九十四人である。

当然、死者の数もはっきりしない。唯一の官製資料「外務省報告書」に基いて作った「中国人強制連行殉難状況」(中国人殉難者名簿共同作成実行委員会)には四百十八人となっているが、但し書きによれば四百十九人ともいえそうだ。「草の墓標」は四百二十人、十瀬野公園墓地にある「中国人殉難烈士慰霊之碑」(昭40)には四百十八人という変転ぶりである。

それぞれの数字に、それなりの根拠があるのだろうか、そこまでは詮索できなかったので、結局、「世界」の数字をそのまま使った。

ただ、「秋田県警察史」に触れてある数字だけではどうにも納得がいかない。上下二巻のうち、下巻三九四ページには鹿島組花岡出張所として「移入者九百七十九人、死者百三十四人」とある。「移入」という表現や、「華労勞工協会」が仲介した労働者であると断わっているのはともかく、死者の人数は何だろう。意図的に少くしたのかもしれないが、どうも、六月三十日の蜂起以前の死者がこの人数だと思える。蜂起後は、死体をまとめて八十人、四十人と穴に埋めたり、後仕末の不備で死亡届けがうまくいかず、警察でも人数を押しえられなかったのではないか。あるいは、警察にも多少、後ろめたいところがあって、人数をはっきりさせられなかったのかもしれない。

いろいろな考え合わせると、中山寮に収容されるはずだった中国人は、一次連行者三百人に続き二次六百人、三次百人の計千人だったろう。その内十四人が何らかの理由で死ぬか殺されるかし

て、結局、鹿島組に引き渡されたのは九百八十六人、船中死亡、途中死亡も含め四百十八人が死んでいった。つまり、千人の中国人が強制連行に關係して、四百三十二人が死ぬか殺されていった、というのが花岡事件の全貌と言えるのではないだろうか。

敗戦前夜

「花岡事件・三十年の壁」の連載では、できればマイナスの証言とでも言おうか、取材拒否された話を中心に、事件の概略をまとめたかった。歴史の影の部分、写真のネガフィルムのように明暗を逆転させて写し出し、三十年も経ったのに何故「花岡事件の証言を拒むのか」という点に、人々の精神的な苦痛、事件の異常さを描き出そうというのだ。が、連載の中ではわずかに「取材を終えて」で少しそれらしいものを報告したほかは、当初の試みはほとんど失敗してしまった。

それにしても人々は、思ったほど取材を拒否しなかった。ためらいを見せた瞬間に、「名前は結構ですから」と安心させたためもあるが、こちらの期待通り取材を拒否したのは、花岡町や周辺の村々の十数人と、元中山寮補導員、寮長代理の二人だけだった。正直言って、これにはいささか拍子抜けした。むしろ、戦後、積極的に花岡事件を発掘し、人々の記憶にとどめようとした日中友好協会の人たちが受けた無数の圧力や不協力のう形の中に、事件の問題点がこもって

たような気がする。

もう一つ、取材の前から、花岡事件で最も活躍した人々は、警察や軍人よりも、ごくあたりまえの農民であり住民であったのではないかという気がしていた。しかし、この点はよく分らなかつた。国民精神総動員法で、日本は世界に冠たる国とたたきこまれていたと言い、確かに「中国人なんて屁とも思わなかつた」と当時十七歳だった男が証言しようとも、結果はそれほど格好のよいものではなかつたのでないか。八百人近い中国人が、闇にまぎれて花岡周辺の山々に散らばつた時、周辺は恐怖のどん底に突き落とされただろうし、ほとんどの人がおっとり刀で山狩りに参加したのだと思う。その恐怖が、人々を凶暴にして、足腰が立たないほど中国人を打ちのめしたり、刀や槍で突いたのだろう。

II 取材ノート

もちろん、それはそれで一般の住民は残酷だったかもしれないが、警察や特高の組織的な拷問はそうした残酷さとは明らかに質が違う。中国人に対する拷問ではあつても、それは、皇国日本、天皇に逆らつたものの運命を、住民の骨の髄まで見せつける役目を果たしていたに違いない。当時の過酷な鉱山労働や戦時下の苦しい生活は、中山寮ほどでなくとも、周辺の村々や花岡町の日本人をも極限状態に陥し入れていた。藤田組(現在の同和鉱業)が昭和十九年という時期に、娯楽施設・共楽館を建てた理由もそこいらにあつたのではなからうか。軍部や警察が山狩りに県北一

帯の住民を駆り出し、一方で捕えた中国人をたたきのめし、殺していても、住民の方は本心ではどんな気持ちだったのだろう。握り飯を食べさせた話が各地で伝わっているのは何故だろう。三浦元署長が証言するように「地方民は、警察の制止をきかずに、中国人を殴らせろといっている」というのが現場全体の雰囲気だとしたら、とてもこんな握り飯の話は伝わらないと思うのだ。

花岡や周辺の村々で、取材中に幾度か、何故中国人が中山寮から逃げ出したかという話を聞いた。細部はいろいろ異っているが、大体はこんな形だ――。

「一晩歩き続けられ、海に出ることが出来る。そこから船に乗れば、中国に帰れるはずだ。捕縛員に見つかると邪魔されるから殺してしまおう。食糧をたらふく食べて、元気をつけて逃げよう。体の悪い人間は仕方ないから置いて、寮の建物には火をつけて焼き払ってしまおう……」。

「でな、扇動したんだべな。獅子ヶ森さ上って見たら、下の方に大きな池があるのが、ちょうど海に見えたんだべ。大した喜んだというな」と言って笑った人がいた。「地図なんてねえもんだから、方角まちがったのも知らねえでな」。

その口調に「チャンコロ」と呼んでいた頃の日本人の影を見たような気がする。が、それにしても何故こんな話かもてはやされるのだろうか。「物語りに飢えていた」せいもあるろう。中国語の解る人が、捕えた中国人から断片的に聞いた話もあるうし、取調べに当たった警察関係者が住民に教

えた話もあるう。が、どうも、蜂起の意図や実態を蔽い隠すためにこんな他愛もない話が、かなり意図的に、口伝てに広められたような気がしてならない。それは、まさに敗戦を肌でひしひしと感じていた軍部や警察、それに一般の人々にとって、甘い期待を持って広がったかもしれない。

戦争は分らなかった

唐突だが、花岡事件を取材していて魯迅を思い出した。確か岩波文庫の「阿Q正伝」の前書きに、彼は、自分が何故文学を志したかを書いていた。漢方医学に父親を助ける力がなかったことで西洋医学を修めようと日本に留学。医学の道を学んでいた彼は、授業用のスライドで、たまたま当時のニュースフィルムを見た。日露戦争の場面で、ロシア軍のスパイをして捕まった中国人が、見せしめの処刑をされようとしている。その周囲には、体格のいい屈強な中国人がうつろな目で取り囲んでいた。その時、魯迅は気付いた。体が健康でも何にもならない、それより精神の改造こそが大事なのだ。

中山寮で、極度に悪化した食事や、毎日繰り返される虐待は、肉体的な苦痛を強いた。そのせいで何十人も死んでいったのは事実だが、それを蜂起まで結びつけたのは、同国人をなぶり殺しにさせた行為に対する怒り、いわば精神的なショックだったというのは注目していい。もちろん、このままではどうせ殺されるといっせいつめられた意識もあっただろうが、何より、精神が肉体

より上位にありうることを、この花岡事件は示唆しているとも思えるのだ。
しかし、それにしても、本当に蜂起が成功すると思っていたのかどうかは疑問だ。イチカバチかというやけっぱちも確かにあったろうが、元八路軍のゲリラを中心とした輪郭はキチンとした計画を練っていたから、成功の可能性に賭けたというのが真相だろう。劉さんが、ありったけの薬品類を身につけて逃げようとしたことに、かなりの長期戦を覚悟した組織的な蜂起の様子が窺える。

先輩の新聞記者が電話をしてきた。彼の友人に花岡出身の人がいて、酒に酔うと、花岡事件で自分が目のあたりに見た光景を説明しただすのだ、という。「僕は花岡事件の体験者なんだ」というその人にとって、花岡は常に原点なのだ。大館市役所職員で、日中友好協会正統本部大館支部の佐藤博彦さんも、花岡を原点に持っている。「人間性を根元からひっくり返されたような感じがした」と言いながら、佐藤さんは酒で赤くなった目をしばたいていた。

資料を漁り、体験者に話を聞き、獅子ヶ森に登り、周辺の村々を走り回り、共楽館前の広場にたらずんでみた。が、やはり、戦争は分らなかつた。自分が戦後生まれだということもある。戦争に行った父親は軍医で、伊豆七島の新島で平和に暮らしていたし、医者強みで、食糧不足ともあまり縁はなかつた。家には、戦死者もなく、暗い戦争の思い出はどこを探しても伝わってこなかつた。その意味では、いつも知らないことを書いていくという感じがつきまるとって、雲の上

を歩いているようで不安だつた。戦争はやはり分らなかつたという戦後世代の一つの報告になつたことは、気恥ずかしいことだが、偽らざる本音でもある。